

# Living on a Prayer

こんにやく

## 1. トミー

---

トムソンは港で働いている。

彼の仕事はタンカーから港に運び込まれる様々な荷物を指定された倉庫に、重機で運び込むこと。その逆をすることもある。つまり倉庫からタンカーに荷物を積んだりもする。別に、どっちの仕事をしたからといって日払いの賃金がいいわけでもない。どっちにしる悪かった。

彼は本当は、タンカーに乗って海原を旅したかった。海軍でもよかった。なのに七つのころに目を病んでから、分厚い眼鏡を欠かすことができなくなってしまって頭を病んだわけじゃなかったが、勉強ができるわけでもないからハイスクールを中退してからこの仕事についた。ハイスクールにも、この場所にもどのくらいの年月を通ったのかはよくわからなかった。体だけが不恰好に大きく重くなっていくようだ、トムソンはぼけっと考えるときもある。けどすぐに飽きて体を動かす。それだけでいやなこともそれなりに忘れられた。

その日の朝も、いつも通りの時間にロッカールーム行くと、トムソンはすぐにいつもと違うことを感じ取った。苔の生えた薄汚いコンクリートつくりのロッカールームに入る前から、中の喧騒が彼の耳に届いていた。耳だけはいい。中で男たちが「ストだ」「サボだ」と叫んでいるようにも思えた。金属のノブの手をかけてあけると、一瞬間視線がトムソンに向かったがそれはすぐに散らばる。いつも昼飯を食うダズもサンベルもミカエルも他にもたくさん仲間がいて、勤勉で有名なコペックじいもそこにいた。あと半時もすれば始業時間なのに、コペックがここにいるのは何かおかしい。

かび臭くて、むき出しのコンクリートがいつも湿っているロッカールームには大の男がぎゅうぎゅうとうごめいているのだから、よけいに蒸し暑い。何事かときよろきよろして男たちを押し分けながら、なんとか自分のロッカーにたどり着く。そもそもこんな時間に、ここに人があふれかえっていることが少しおかしかった。

怪訝にもトムソンがロッカーからヘルメットをとりだそうとするとダズがにやにや笑いながら、トムソンのロッカーをばたんとしめた。もともと凹んでいて歪な形のロッカーの扉はますます不自然な形になってめりこんでいる。ダズが笑う。口の隙間からアルコールの匂いが漂う。

「ストだぜ、スト」

ロッカールームに入る前に聞いた言葉だと思いながら、めりこんだロッカーを開けようともう一度手を掛ける。その様子を見ていた赤い巻き毛のミカエルは、トムソンの後ろで赤い唇でげらげら笑った。

「おいダズ、トミーはストの意味もわかんないんだ！ストなんだぜ？働かないんだ！」

「うるせえなミカエル、お前はベイブのコックでもくわえてな」

「なんならダズ、お前のジュニアもくわえてやってもいいんだぜ！」

冷やかしが冷やかしを呼び、ロッカールームが口笛とブーイングでうるさくなる。

トムソンは気にしないで、めりこんだロッカーのドアを引っ張ってみるがどうも調子が悪い。

それを見ていたミカエルが余計に笑う。

「バッカ！ストはみんながやるからストなんだよおたんこなす！」

「お前みたいな間抜けがいるから、ベイブにピンハネされんだよ」

サンベルもそう言って笑う。もちろん、トムソンも彼らのボスであるベイブー子豚に見えるからそう呼ばれている—が本来の賃金よりもずいぶん低い額で、自分たちを雇っていることも知っている。少し前だが、ベイブのベンツのランクが二つあがったのだと誰かが言っていた。だからといって、それが腹立たしいから辞めるかといわれれば答えはノーだ。ここしかない。ここが、いい。海が見える。それだけが、トムソンの救いだ。

結局、ダズもミカエルもサンベルも、もちろん他の男たちも「スト」の意味は教えてくれずにいる。皆が可笑しな熱に浮かれて、卑猥なジョークを言い合っては笑いあっている。いつもと変わらないといえばいつもと変わらないのだが、トムソンは働いていたかった。重機のエンジンの音や、油の臭さや、入港してくるタンカーを見ていたかった。彼らの笑えないジョークも、青空と潮の香りをかきながら聞くべきだ。そこだったら笑えない冗談にも頬は少しは反応する。はあ、とため息をついて額にういた汗をぬぐった。ふと、隣から懐かしい匂いがするので視線をやると、コベックじじいだった。

彼の年齢を何度聞いても忘れるし、そもそも聞いたのかもトムソンは思い出せない。じじいといわれているのだから、まあそれなりの年はいっているのだろうが、そもそもそれなりの年ってなんだろう、と、トムソンはいつも思う。

「よおトミー、ため息か」

「ストってなんだ」

酒やけか、タバコのせいかな、たぶんそのどちらでもなのだろうがコペックの声はしわがれていて聞きづらい。が、トムソンは彼の声がこの男たちの中で一番好きだった。今はもう遠い昔の話だが、父親に似ている気がしたのだ。コペックは拳をにぎったりひらいたりしている。思案しているときの彼のクセだ。それにあわせて腕全体の筋肉が美しく動いているのが分かる。日焼けもきめ細かで、美しい。

「ストっつーんは……ベイブに直談判するってこったろーよ」

「何を」

「給料あげろってなあ」

トムソンは驚いてコペックを見るが、コペックはいつのまにかタバコをふかしている。

「俺がここで働いている間に、そんなことは一度もなかった」

「俺あ四回目だ」

「上がるのか」

「バカ野郎、あがるかい。あがってたら毎回やってるよ」

「……ベイブのことだ、こんなことしたらみんなクビだ」

「さすがにそこまではしねえが……主犯格はクビだな」

コペックがシガレットケースを差し出してくる。シルバーで、曇り一つなく綺麗なケースだ。トムソンは彼が、それを片時も離さないでいつもクロスで磨いているのも知っている。もらい物なのかと尋ねようとしたこともあったが、知ったところでどうということもないな、とトムソンは思うのでいつも聞かない。いらぬ、とかぶりをふる。驚いた顔をしたじじいに、トムソンは少し笑ってみせる。

「やめたんだ」

「ガキでもできたのか」

「いや……生活があるからな」

「そうか。いい心構えだが、たまには息抜きもしろ」

「ああ」

二人ともが黙り込む。

労働組合—そんなものがこの労働者たちにあったことすらトムソンは知らなかったし、ましてや自分がそれに所属していることも知らなかった—の交渉役が事務所からもどってくるとベイブは相変わらず豚のようにピザとコークを取り続けてはこっちの要求を取り合おうともしない、とつばを飛ばして青筋を額に浮かべて、叫んだ。ロッカールームがいきり立つ。明日もストだ、サボだ、などと口々に皆が言う。トムソンは人知れずにため息をつく。

「あんのクソブタ！おいミカエル、一発かましてこいよ」

「やだよ、俺、デブは範疇じゃないの」

誰かがそういうと、ミカエルはにやにや笑って言う。猥雑な笑いがまたあふれた。

一人、また一人とロッカールームを後にしていく中で、ダズとサンベルとミカエルとトムソン

が残った。まだよく意味のわかっていないトムソンを見て哀れに思ったのかダズが口を開いた。

「みんな帰ったんだよ。コペックもな」

「なぜ」

「なぜって……お前本当に頭ばーなんだな」

するりとミカエルがトムソンの腕に絡み付いてくる。倉庫番だからなのか、そういう体質なのか、ミカエルはここで働く男たちの中で一番細い。薄っぺらくて女よりも細くてでも女のようにやわらかくないから、からみつかれても気持ち悪いとトムソンは思う。ミカエルの噂は色々聞かしく、大概が本当のことらしいし興味もない。彼の隣の倉庫の倉庫番とねんごろだから、そこから何かをくすねてもバレないらしいしいつもボスに取り入ってるからもらってる金の額は一番多いとか男の愛人が六人いるとか、でも、どうやらベイベとはできていなかったみたいだ。

トムソンは黙ったまま絡んでくるミカエルの細い腕をはずす。ダズとサンベルが意味ありげにやついている。ミカエルがトムソンを狙っているといったのは、その二人だった。

「俺は働くよ。金がいる」

「あーあー、コペックもびっくりの真面目だな。あいつも明日はこねえってよ」

「んだよな、俺あ今日は飲んでクソして寝るぞ、ダズ付き合え」

「俺も行く！」

「ミカエルはくんな、お前がくると変な男が集まってくんだよ」

「いいじゃない、大人数のファックは楽しいでしょう？」

三人が昼間の明るい空の下を歩いていくのを、トムソンはじっと見つめていた。五月の日差しに温められたアスファルトからの熱が、薄っぺらくなったズックを通してトムソンの足をじわじわと温めている。その痛みは、誰にも伝えられないこと彼は知っている。

## 2. ジーナ

---

ジーナは一日中、たまに半日、ダイナーで働いている。

真っ直ぐ道が続く、荒野に毛が生えたような場所で晴れた日も雨の日もダイナーで働いている。雪は降らない。

モーテルが道路を挟んで三百メートルぐらいのところにあって、その客が昼だったり夜だったり、たまに朝にもくるが、大体十分もないですぐに帰る。モーテルより少しはなれたところには日用雑貨の店があって、たまに材料が足りないときは、ジーナかジーナの二つ下のエイミーが買いに行く。でも、エイミーが買いに行くとお釣りがタバコに化けるので、最近はジーナが買いに走ることが多い。

ジーナは、ダイナーの制服が好きだった。誰にもいったことはなかったけれども、パフスリーブで水色と白のストライプのワンピースに、白いエプロンをつける。動きやすいように白いズックを履いてるけれど、もうずっと使っているので灰色になってしまった。オーナーにも、エイミーにも、コックのボブに言われても買い換ええないのは、初めて彼がくれたものだったからだ。だから、破れるまではと彼女は思う。それに買う金もない。

その日は昼からの出勤で、ジーナは制服のワンピースを着て上からグレイのパーカーを羽織って、シュシュで髪の毛をポニーテールにあげたときに、誰かがアパートの廊下を走ってくるのが聞こえた。ぼろぼろになった絨毯をしいてある廊下は、もう床板がむき出しになっていて大家に何度も何度も言っているのに、直される気配が一切ない。歩いてくる人の足音で、ジーナも、たぶん他の住人でさえも誰がきたのかわかる。

ジーナは髪の毛を結んで、もう一度リップを塗りなおし、その鏡越しにドアを見つめる。

「トミー」

「ベイビー」

トムソンが入ってきてすぐ、ジーナを後ろから抱きすくめる。いつもならきついほどの汗と、他の男たちが吸うタバコの匂いと、外の匂いがするというのに今日はトムソンからはその匂いがしない。湿った、かびくさい匂いが彼女の鼻に届いた。ジーナは、自分の首に巻きつくトムソンの腕に指を這わせた。汗ばんで、茶色く日焼けしているその腕はたしかに彼のものだったが、それでもいつもと違う。

「どうしたの？どこか悪いの？」

「違う……ダズとかが……なんだっけ」

向き合うと、トムソンは悲しげに眉根を寄せている。分厚いめがね越しでも彼の瞳は真っ直ぐにジーナを見つめていた。

「ベイビー、レンズが汚れてる。かして、ふいてあげるから」

トムソンは大人しくめがねをジーナに渡す。彼女はそれをスカートの裾で丁寧に拭いた。かけなおしてやると、トムソンは落ち着いたようでふう、とため息をつく。

「スト、っていうのを、はじめたらしくて、明日もさ、ないんだ」

「ストライキなんか……今までなかったのに」

「コペックも、四回目なんだって、俺、帰ってきたけど」

「ああベイベー、私これからなのよ。行くわ。夜はうちに来て？」

「なら送っていく」

「ありがとう」

二人で部屋を出る。廊下は相変わらず、足音をアパート内に響かせる。

「ママから電話があったの」

市外に出てしばらくして、ジーナの働くダイナーが見えてくる頃に彼女が切り出す。

トムソンは黙ったまま、駐車場にとめてエンジンを切った。トムソンの母が、トムソンが家を出るときに、せめてもの餞別にと贈ってくれたクルーザーだったがモデルがもう何年も昔のもので、贈ったといっても使い古しをもらっただけだったが。その母も、末期がんでホスピスに入ったと聞いて母の兄弟に世話を任せて以来連絡をとっていない。幼い弟たちは、たしか叔父の家に養子に入った。やっぱりそれも連絡をとっていない。トムソンの父親も癌で亡くなったし、祖父はギャングの抗争に巻き込まれて流れ弾で死んだ。ジーナだけがトムソンの家族だった。

「ジョシユは」

「.....うん、元気に育ってるって」

「そうか」

「うん」

ジーナは真っ直ぐと前だけを見つめているので、トムソンもそれにならった。ママ、というのはジーナの伯母で、今はジーナとトムソンの息子のジョシユの面倒を見てもらっている。

というのは、本当は事実とは少し違う。

ジョシユはジーナとトムソンの息子ではなくて、ジーナとジーナの父親の息子だ。その所為なのか、ジョシユはダウン症を患って生まれてきた。ジーナの父親はジーナに乱暴をしてジーナの母親を殺して、今は刑務所にいる。通報したのはジーナの小さな弟だった。その小さな弟も精神を病んで遠くの病院にいる。

ジーナもトムソンも働いているが生活をするにはやっとのラインで暮らしている。ジョシユを育てる余裕はなかった。生活保護の審査には毎回通らない。そんな二人にジョシユを育てるのは無理だという市の判断で、ジョシユはジーナの伯母に預けられて、もう四年たつ。伯母のエヴァはよくしてくれる。二人の唯一のよりどころでもあった。

月に二回だけ、ジーナとトムソンは休みを合わせてとってジョシユに会いに行く。ジョシユは大人しく、二人に抱かれて眠る。彼がトムソンとジーナが親だと認識しているのかどうかはよくわからなかったが、小さな息子の体温は二人の支えでもあった。

「ギター」

ジーナは車をおりながら呟いた。トムソンには、それが一ヶ月前に質にいれたギブソンのギターのことだとすぐにわかった。ハイスクールに入学したとき、祖父が買ってきて、それをつまびきながら好きな歌を好きなだけ口ずさむのが彼は好きだったのだが、生活を切り詰めていく中で手放さなければならなくなってしまった。売りに出すときにジーナはずいぶん反対したのだけれど、トムソンには今の生活を守る方が大切だったから、もちろん未練がないわけじゃなかったが格別いやな思いをしていたというわけじゃなかった。たまに祖父のことやギターのことを思い出してむなしくなる程度だった。

「ジョシユを迎えるまでには、返してもらわなくちゃ。きっとあの子も、トミーの歌を聞きたがるわ。私だって聞きたいの。」

「ジーナ.....ごめんよ。今日の分の稼ぎも明日の稼ぎもないから.....」

「ねえベイビー」

片ひざをシートにつき、ジーナは半身を車に寄せる。トムソンも身を乗り出して彼女を抱きしめた。五月の、乾いた風が車内を満たした。少し埃っぽい。

「大丈夫よ、私たちはいつもお互いの幸せを思って愛し合ってるわ。だから大丈夫よ、ねえ、そうでしょう？」

「.....ああそうだ、俺たちは大丈夫さ。いつか、ジョシユと暮らせる日がくるさ。きっとね」

ジーナはとびきりの笑顔を見せて、ダイナーに向かっていく。黒髪のポニーテールが、トムソンにまるでバイバイをしているように揺れながら遠ざかっていく。



「そうさ、大丈夫」

つぶやきながらふと、トムソンは彼女の爪のマニキュアがほとんどはげてしまっていたのを思い出し、小さなものでもいいからドラッグストアで買って、プレゼントしようと思うのだった。

### 3. Living on a Prayer

---

夜、ダイナーの人気がなくなったところにトムソンはドアのベルを鳴らす。ホールにはジーナとエイミーがいて、二人が同時ににこりと笑う。コックのボブも奥から顔を出し、陽気にハグをした。

「もう今日は終わりよ！私、足が棒だわ。もういやんなっちゃう。あーあ！」

エイミーがつつかつとドアのプレートをひっくり返して、看板を照らす電気も切った。本当は閉店には一時間早かったが、このあたりでは普通だった。いつもはあと三十分早く閉める。

「ボブ！あたしはシュリンプサンド、ジーナとトミーはBLTだつてさ」

窓際の四人席に、サンドとフライドポテトと、売り物にしては粗末なチェリーパイが運ばれてきた。

「これは試作品。オーナーがなんかつくれってうるさくてさ」

「それでチェリーパイって、ボブ！」

エイミーはげらげらと笑いながら、一口二口と食べていく。

「うーん、まあいいんじゃない？2ドル5セントってどこ？」

「そうね、けっこういける。自分で全部？」

「いいや、母さんが昔よく作ってくれてたのを思い出しながらさ」

「へえ、あんたの母さんって結構料理上手だったのかもよ」

ボブが嬉しげに笑う。強面のアフリカンだが、笑顔はとてもキュートだとジーナはいつもトムソンに語る。ゆるやかに時間が過ぎていったが、殆どがエイミーとジーナの話にボブとトムソンが相槌を打つだけだった。エイミーは明日大学の試験なんだそうだが、講義にそもそも出ていないので勉強もする気はないらしい。それよりも彼女が最近気になっているのは、いかに鼻の頭のそばかすをキュートに見せるか。ジーナはいくつかアドバイスをしていたが、コーラル系のチークを薄く塗るといいというところに話は終着したらしかった。

「お休み」

「おやすみ」

二人と別れ、ジーナとトムソンはまたクルーザーに乗りこむ。もちろん、ほぼ毎日同じダイナーで働くのはつらくないことはなかったが、ボブやエイミーに助けられていると、ジーナも思っているしトムソンもそう思っていた。彼らは、ジーナとトムソンがただ普通の夫婦だと思っている。それも事実とは少し違う。けれども、ゆくゆくはそうなるつもりで、二人ともが傍にいる。

「ああ、そうだ、ジーン」

少し気分がいいと、トムソンはジーナのことをそう呼ぶ。彼の一番下の、もう顔もおぼろげにしか思い出せない妹の名前がそれだったからだ。その妹も少し前にオーバードーズで死んだ、と市役所だったか保健所だったか警察だったかから連絡が入った。涙は出なかった。どこでどうしていたのかもしれない妹だったから。ただ、可愛かった記憶しかなかった。それでよかった。

ジーナは少し不思議な顔をしてトムソンを見つめている。

「これを。あんまり、よくわかんなかったからさ」

「何？」

手を差し出すと、ジーナの掌に小さなマニキュアの瓶が渡される。深い、緑色だ。これからの季節、きっと木々が茂るであろう色だった。重油で黒くなってしまった指や、爪が、この小さな瓶を選んでいたのかと思うとジーナは自然と涙ぐむ。これでトムソンからのプレゼントは二つ目だった。ありがとう、と言う間もなく声が震えてしまって、トムソンが右手で彼女の頭を撫でた。

「今度、ジョシュに会いに行くときにすればいいよ」

「そうね。……ねえ、トム、今度ジョシュに会いに行くときはバスケットをもってどこか遠くにピクニックに行きましょう。私もあなたも、それにジョシュも、きっとリフレッシュになるわ。ものすごく遠くってわけにはいかないけど」

「そうだね。それでミサにも行こう賛美歌を聴くんだ、とびきり美しいやつ」

二人は、家に着くまでの短い間ではあったが、その時間、手をつなぎ続けていた。

END